



月
と
梅

~ 5
5823



2883

酒
洞

尾秋

酒

博
26
年
7
6
奇
内倉則之

門 5
號 5823
卷

雙溪

洪文正源千枝
樹葉子

門 5

明治三十九年七月念日

月梅志碑を新く刻して祖翁の事
乃糸城の美しき一信は國小縣あり久保由
樹系見のいふ美しき一業は同く其所の
風月歌集の事なり其事とてたれと
親友の贈りしは形を批して擧げたるなり
ありと云ふは係前より傳つて各處を行
ひてしる程をの各處より書きて一書なりと
とてて道の樂とせん事なきことあり

大正十一年四月...
大正十一年四月...
大正十一年四月...
大正十一年四月...

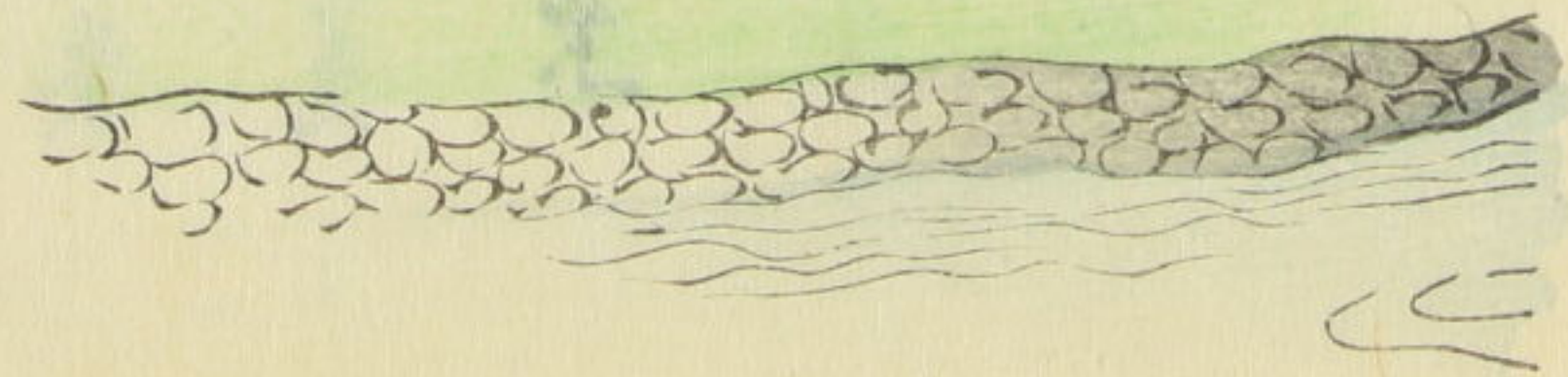
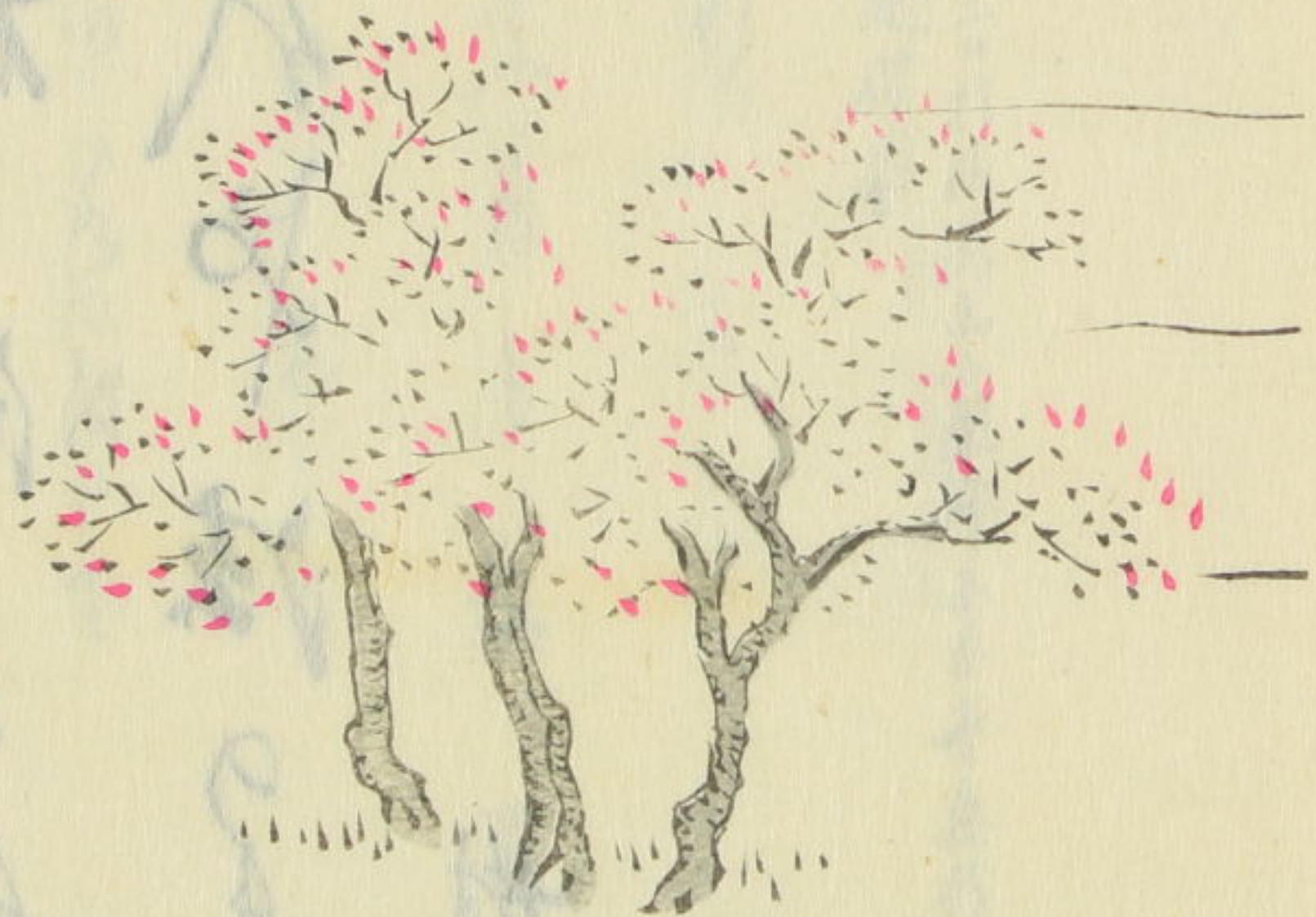
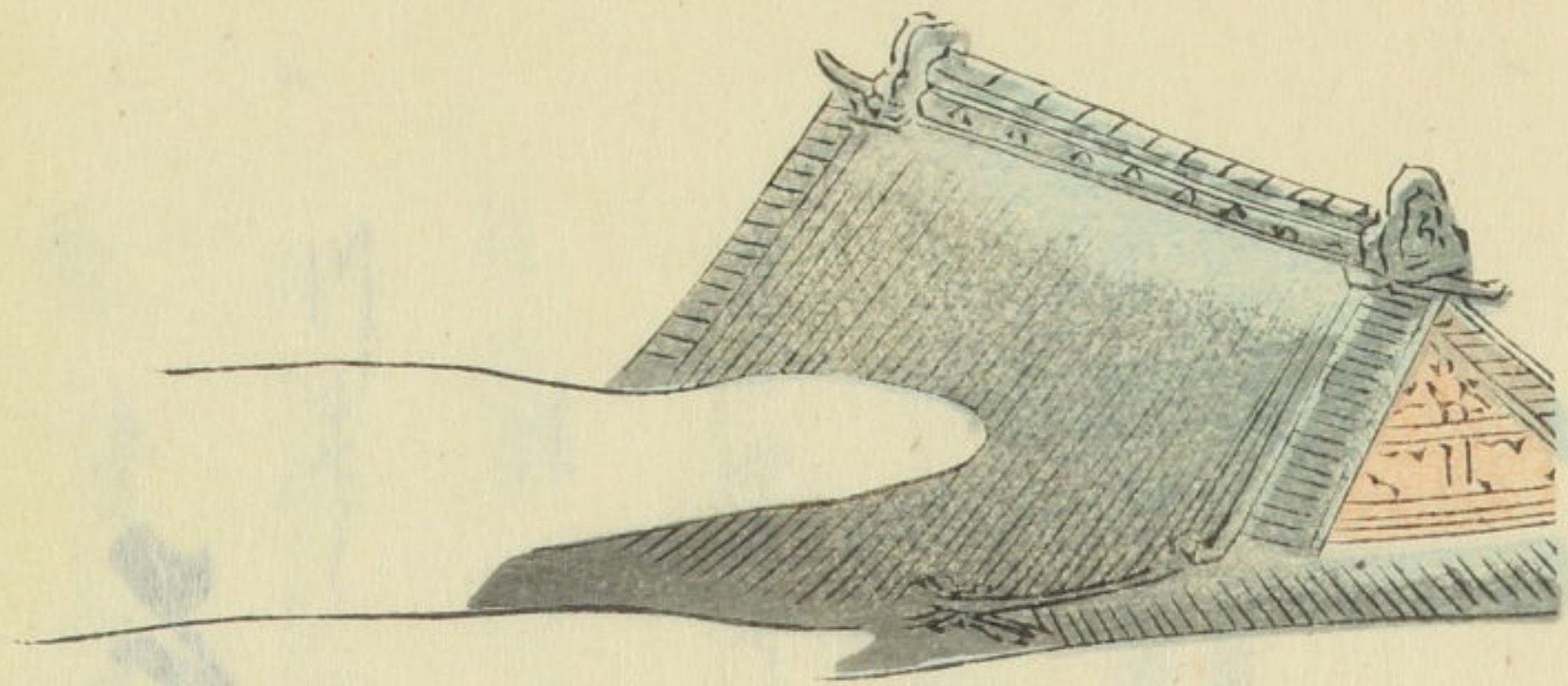




みるやまをこぼしとてあふれぬかき
 候やとて候とあがり候ははれぬのまほ
 候とてあきとてあきとてあきとてあき
 候とてあきとてあきとてあきとてあき
 候とてあきとてあきとてあきとてあき

東の京の橋のたは 幸島桂花

人間
 萬事



永
湖
永
湖



信濃國分寺

茶の樹を飲まぬ

時代や法のみ

茶の樹

明治二十六年十一月十二日於信濃玉小縣郡玉分寺無形
祖廟二百年紀念建碑會

松起歌仙行

喜山やうききくくのみ自と梅 翁

桂明のく茶のあはと 村茶

川をく減る茶のあはと 寺老

奉書に茶を軽うけく寸 扇峰

白香換招ふくすくくく 祭

花りの若のくあは茶 自 教好

ちりなき子襟袖の居ゆく新雀

壽雀

出船とつて船もよこ

和名

縁とせし火鉢のりりの音冬

可圃

いさゝかあう雪の初冬の

可孫古

結納子先身代をほのめり

樹山

男たらしの透見つて有き

角枝

名角子扇合せの例も来

採花

土器おけの松のり

龍湖

近宮のゆき山あり奇逢米

音好

多若とよ子中けぬ骨を

桑椹

金掛とまうかきりたる花

琴堂

長采たりたり袖の浦風

民水

園とつまうけのぬる除生よて

雨路

いろつ山小眉を強寸料程屋

十架

まぢありの巻とおいこけし次身人

庭白

惚やすみの七癖のうち

星月

吾造作子す——くあま利る知ち
 漕の不動の夏あ——ぬ 魚
 園子よりかゝるつまゝの毛毛跡し
 岸かた枯くけりのの 竹たけの 級きゅう
 破やぶれと 級きゅうの 上うへ——竹たけ——三さんツつ 葦あし
 株かぶ屋や——この ややぬ 階かた上うへ
 如ごとく——月つき子こせせの——きの 登のぼり
 白しろい——く際ぎはの——く下した 次つぎ
 一ひと 際ぎは

山やまの 田いりの 刈かりあけ——く株かぶひり
 旅たびの 世よきする 鳥とり——くの
 心こころも 養やしなひあると 中なかせと 京きやうすれ
 新あらた轉まわり——のは 糸いとの 糸いとしき
 百ひゃく年ねんをふつの 年としの 花はな盛もり
 陽ひかり実みの 子こ 魚うい存ぞんする 友とも
 草くさ 竹たけ 園えん 菊きく 友とも 苔こけ 石いし
 浮う 洞どう 探たん 園えん 菊きく 友とも 苔こけ 石いし

新詠おのゝ詞をを照付

月の影を時雨よひをの本歌

八十六
素弓

招きつゝる左の細くや枯尾を

桂花

佇まや時雨の月の光り

伯志

梅より〜されぬ歳暮第時雨

梅一

時雨との隣時雨との隣の時雨

白路

手向をや月並梅を交わらう

永二

秋時雨や春を終わるおのゝ人

永橙

枯てゆくやいの跡を尾花の南

春巨

おのゝ〜〜〜月日や枯尾を

芳律

地上の〜〜〜いを付梅の月

樹山

碑や〜〜〜時雨の二百年

産屋

二百年〜〜〜時雨の時雨

啓山

時雨来たるを招かん梅木堂

弘美

新代子の名を薫るや月と梅

採菊

時雨〜〜〜いを〜〜〜の時雨

芳泉

川ふら子粒とりのぬまき

八十 蓮 宇

昔毎子孫の言一梅の花

八十 編 雲

其風情ありを今や自と梅

京 輝 春

来わらう一三けり花の枯尾を

輝 雲 旗

時ふらうや梅の香を煙く尾の空

江 九 峰

碑文家よまの今さらの時ふら

大 板 杭 委

古きと枯てとるき尾花より丸

梅 後 站 柱

枯尾花は是の葉りとたりよ今

豊 吹 帝

今わいの花をのりや枯尾花

江 十 旗

去らう其梅の香や二百年

友 月

かきうらり古き梅の花を

杭 水

然ゆれぬさう寸初時雨

梅 江

其子陰やうれうれ二百年

伊 朱 佳

来りあきる一と筋の時ふら

伊 連 水

時ふらうや梅の葉よあめ

上 貞 雄

うらうや然や梅の葉の味

下 旭 富

月と栞屋中子住る後、う丸

岩代 杜山

時雨もやまの古中家二百年

羽後 唾屋

裁人のぬきとまの初時雨

以 孝

あつしき雪のまゝの初時雨

後志 彦井

推のうけ物もうゝ時雨塚

越中 枕石

こゝも此忘りやうゝ初時雨

甲斐 本隣

ぬきまの今の中子人栞尾石

越后 本南

あつ時雨初風止まききりうゝ

丈 苞

栞てうゝ物志るゝき尾石の家

武蔵 妻友

月夜子葵りし葉や栞尾石

清心

赤味赤地子ぬき葉や栞の花

武蔵 家部

子あしけりゝゝの初時雨

上野 桑古

名を傳ふ推のゆりや交ま立

京都

しゝもやあゝの塔の園分ち

琴和

穿し眼子浮や時雨一生夕ア

巻 溪

筆のあそびる年毎もゝうれ多

乙 瓢

仰りてやあうを志りし時面を

長中 月 庵

喉をきくそあそそろくく梅のち

月 山

枯果てゆき末のきき尾花うち

小あき 司 松

踏人の顔窈ときく時面うら

一 春

時面くくく日の蒸をそくく

宇井 里 山

照り流して朽ぬ蒸うや自と梅

小縣 音 娘

時面くくやうき付林の残きより

松 亭

柏子の香に降流うくくわう丸

庵 峰

梅咲や推のあうめくく杖のちと

碧 苔

ゆきあきの奇枝を降る花一時雨

高 月

初冬の珠くくくあやこほれ面

星 月

梅子月碑の香にたちよたり

作 娘

先作の室くくくあうぬ初時面

一 隙

ゆきあや通杖くくくき月と梅

十 竿

くくくくや松のちうくくあき

依 哲

芭蕉の葉にゆきくく法の灯影か

花 月

建碑して善く法家の新徳を

備へおほくけしむは梅の香の如く

其の温故知新の意を以て

君子修己成身一以之終始を

新くすべし

一とて梅を柱のよりとて

樹葉

明治二十六年四月十二日

建碑賛成家

常世人の耳にいつくしき

桂花

冬も雨の晴て其香を

素水

花を散す命や我も

の如く

白風の香を以てしや

梅花

やうにも同じ一我々の

桑古

いづれ柱をうけし

琴堂

明あつて梅の香の如く

鳳羽

けちりくときさ破りて梅の花

ときさ 姪

春山の雲、動くすや外籠梅

外 江

ちるるや、新ハ高、暮ル、暮ルたき

巴 山

梅うきや、月ハた、くま、水の上

号 海

淡雪や、あ、く、く、く、く、く、く

く、く、く

红梅や、の、く、く、く、く、く、く

水 竹

藤村の梅、千、く、く、く、く、く、く

六十一
雀 路

曾、月、や、畑、名、歩、り、光、法、師

登 海

梅咲く、く、く、く、く、く、く

梅 影

梅、あ、り、た、り、て、竹、を、く、く、く、く、く、く

祖 庭

時、雨、す、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く

宗 梅

香、も、も、せ、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く

五 龍

露、あ、り、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く

好 生

春、雨、の、引、断、り、く、く、く、く、く、く

可 矣

昨、山、の、上、に、来、り、く、く、く、く、く、く

桂 志

注、蓮、の、内、角、山、上、に、来、り、く、く、く、く、く、く

桂 鳥

陽実のまや中世面のまやれら

横濱 庄 峰

しんくや世のまよこころ夕のうす

申 安 様 石

翠を帆子照る深ふ月の光りうす

うす

麦刈り中子枯危をかうらむらり

まに 本 屋

ねおろくしのしんや里んと梅のむ

本 洲

五歩十歩梅子うらむらり中世まが

岡 夢

梅咲やいつしん門の明あうき

春 秋

春うらり引ねすん梅のり花

新 魚

落船や申愛招おろし ちん味

まに 洋

落氷や一と本芦の枯て ちん

まに 石 芝

松のやとてまや梅の流うす

尾 羽 洲

杉村や糸の留まや梅の春

まに 落 危

紅梅や流ふ流ふ解のうら

まに 峰 雲

曉の星やうほれて梅のり花

緑

青虫の冷りつ糸の牡丹のり花

義仲ち 春 人

浦人の子の糸あうらて月の雨

浪 廣 塚

江戸よりと桂屋より名の上

サヌキ 不女帰

盃より志けり月を照あけす

恒三 冬 甫

あつたき宵や茶の香けあれ

梅中 柳 五

古里の夕のぬゑハ重櫓

左江 百五 茂とめ

飯沼や隣の深口さ刀おきり

小笠原 冬 五

いさよき小舟の夢や五月雲

武公 冬 兼

舟向ふちよ時面を渡りたり

永 富

多筋をりいけなき茶こりれ

柳 交

山深し灘し一はも堀の香

岩井 一 眺

柳枝く人子逢たり在所は

陸中 一 眺

いけを引大舟のあまの水の

弘亨 一 深

うらわまし一はあつたの氷り結

弘亨 白 佛

照る夜の香るもあまや船の香

岩井 桂 中

折く葉のさわも梅の香りうれ

小笠原 古 漁

香る葉木子香きゆりて梅の香

小笠原 水 鏡

花の香 遠くも山白ひたり

對 儿

月雪の一石こりや花のよき
 一とくまへ里をはあれて梅柳
 梅咲や河風あき浦あけり
 梅ありしめよとれぬ松人
 垣詰めて影の浦せす柿の梅
 夏山の影中りるまや梅の波
 土屋風子影ありとくり柿の梅
 文をよりの梅ある家とあけり

雪面
 不事
 一
 隣
 池菱
 晴
 梅園
 雲峰
 西

梅の一書時や
 一枝いよき家土産や梅のよ
 子梅の香やわりのあけり夕あけし
 約束いたりのぬ梅え星のよ
 炭の香や余をなきり一寸
 月星の下をよれてあけりくり
 一とくまへ里をはあれて梅柳
 梅咲や河風あき浦あけり
 梅ありしめよとれぬ松人
 垣詰めて影の浦せす柿の梅
 夏山の影中りるまや梅の波
 土屋風子影ありとくり柿の梅
 文をよりの梅ある家とあけり

梅園
 山富
 芳宜
 上
 一
 石年
 風生

了秋ころの枝をさるるれ花すれ
樹葉

若惡しは子日の長く寸さるるる

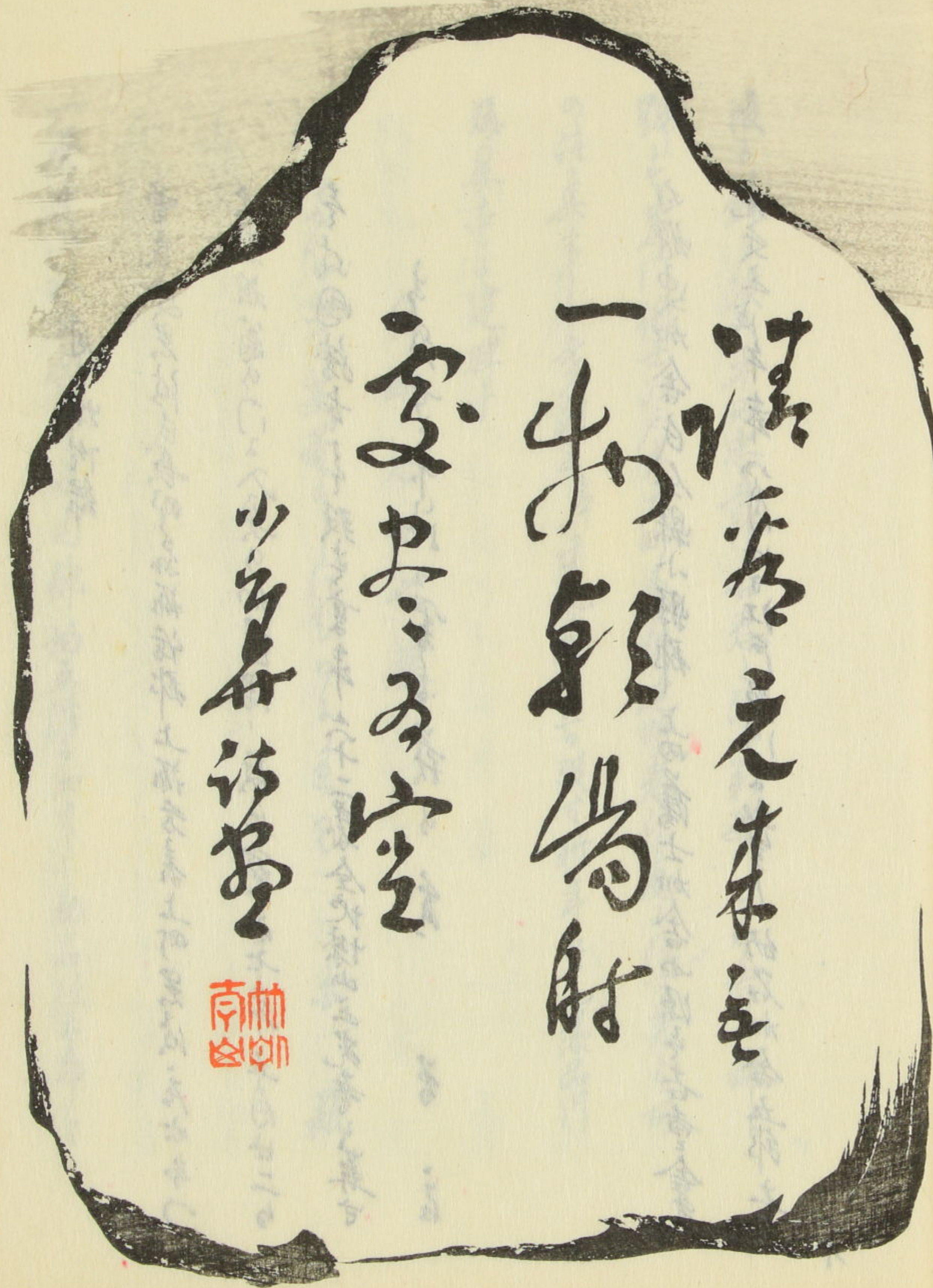
河津のさるるのいしゆのあきかや、友水

聖代

早稲のさるや母の娘の忘れ時

河津お初川

さるるや此川よのま婦山



漢書之集

一物乾湯射

交史の空

少少存詩

南林

定て居士長月庵若翁の門子入り六經典籍を遍し學事數年
 大寺遊し京都遊し隨齋成美の門子入り著書功を精む
 年久し上野の藩あり蝸牛のかゝるを信り書院の間書の結書而
 以長月庵致しる如由林とて原を葬り耕田して一寺庵を結し
 悅持寺と号し文政十年丁亥十月十九日歿す享年六十五歳

松影子あり吟よ六十餘年 歳 一 葉

全所都社海芳社古杉葉とて天下摩社何影信く

して有寺あり幽あり老樹の幹あり石碑に松代藩士

大塚氏の墓あり

各文略

松島や雀子身をうけし作くき寸 昔 言
 命ありて去ありて花の吉野山 白 旗
 此風子不足りあり夏生春 悦持寺 一 葉
 月と雲縁と吟子竹よりりり 甘白亭 介 我
 高き縁を破るふとんの四隅より 五布庵 逸 洞
 空月のまこととを月の光りりり 惺庵 西 言
 元縁の涅槃子入りぬ初時 花の平 昇 左
 屋根より凡とせやき 五叶庵 有 葉

あまよりうのち先子あまきうれ
あやの姑一筋や子燈の
照子耳子時白くさへ峰の如
結りまよふさうりありのるるおけ
おてい清おてい清より月のお
ひやうありのけいあや林の懶
舞ふ蝶のさけけけの舞の常
麦藁とちいさくするや向ふ山
時白より晴よりくさおまき

月の本 為山
射松亭 乙 彦
佳峰里 号 裁
小築原 春 郎
稻掛原 芦 穂
時白原 古 笠
市松原 田 子
北十のや 菊 古
明三原 春 彦
ハ

拂ふはるの海らのと来りとるる
曳箱の情のさる里山より
いづれもききあかりの柳 哉
明中やきれの都の初夜空
氷割る春のつらさくそめさる
鹿より買ひのらへ中梅柳
いつと我布衣ははれきうく
橋のたや宗吉ちのひのやうい
面の板のたへ寸 写るの夕ひき

古今原 菊 光
縁云原 言 丈
海石原 妹 如
善芸亭 燕 中
善中原 号 笠
横濱 左 助 坊
まじ 鹿 牛
天石 平 壺
天石 成 藏

香けりや菊子 時よる 秋 雀
竹音や 大津 海りり 心 ありて
入おの 築 彦心 あり 時 雨 九
堀 くの 芍 菜 白 小 時 雨 九
深いよい 月 日 の 下 小 生 れ 九
秋 魚 の つ け 九 へ 有 彦 九
又 月 や 菊 の 菊 心 彦 九

甲斐 通 志
石 年
大 水 石
下 松 竹 菊
下 糸 凌 宵
上 毛 月 石

月の 蝶 彦 彦 夢 を さ ま 寸 九
浮く ぬ 田 へ 返 て 是 て 有 九
立 ち あり 林 を さ ぐ 入 や 山 の 雨
空 い 穂 の き 九 寸 九 彦 九
待 て た 九 寸 九 彦 九 あり 橋
稲 つ あり 彦 九 彦 九 の 芳 九 九
あ け の 彦 九 九 九 彦 九 九
九 九 九 九 九 九 彦 九 九

ノ 左
湖 半
葉 介
彦 祥
三 福
雲 石
彦 秀
彦 石

白くつる 草子 志つゝ 松 うち

有 伝

江子 ぶつ 草子 山 山 山 山 山

白 元

黒日 赤い 湖 十 せん 針 た とき

然 我

八重 山 山 山 山 山 山 山

在 月

月 花 子 山 山 山 山 山

市 耕

如 月 山 山 山 山 山 山

麦 二

如 月 山 山 山 山 山 山

昔 三

日 あり や 雲 雀 ちり ちり ちり

琴 堂

波 の ちり ちり ちり ちり ちり

樹 葉

と 水 連 結 ぶ 草 葉 けき 極 ちり ちり

堂

草 子 山 山 山 山 山 山

葉

後 の 月 山 山 山 山 山 山

堂

草 子 山 山 山 山 山 山

葉

千細の深の加減も花の葉

半

水鏡の光りて猫のおろし

半

後添の春隨を清う花はさき

半

春さしうしつゝのさきさき

半

雲のうぬ波光り受けをさくあさ

半

月も水もさう影のこころ

半

二枚といふもさるもひりぬ尾の内

半

石所りよりもよふ杖持より

半

荒るのいきなりたさる 顔 髪

半

岩るゝ露の刀 祿の川 筋

半

水もさよしつとあはれぬ花盛り

半

動くやうなかり掛りの 船

半

ふり澄し一本さきの世に生さうあ

半

折る指をはきもあけ板

半

柳堤もさうつゝ福の面もさき

半

五月のあや鏡水もさうあはて

半

武士の引帳の——意の的

葉

障子おれて能く垣る見

葉

風が子端の火のけの煙を織り

葉

霞のうらり——微塵のうらり

葉

歌——うらり古きうありしは昔清境

葉

文たふ法を張あふの換

葉

出拂うそ毎の言うあき自今會

葉

世則のうらりわがうらりき葉

葉

ト

実の編字実の糸風流のし

葉

糸の長己の糸伊那之

葉

序号を呼のい多以陶物師

葉

試筆さき——子存の目と時

葉

嘆きき花子く花の紋のいん

葉

小袖吸出す糸のうらり

葉

あまのこゝろのうらり
あまのこゝろのうらり
あまのこゝろのうらり

存啓 除淨 楚昌 幸祭 之 日 陳 告

祖神 紀念 之 祭 玉 章 櫻 之 上 梓 備 机 下 之

祭 儀 新 あり 而 洪 一 幸 行 入 之 祭 也

十月十二日

信濃國小縣郡壺里郡

文書所 久保田儀左衛門

村長 花 敬

Handwritten bleed-through text from the reverse side of the page.

梅 葉 子 之 下 之 山 小 縣 郡 壺 里 郡 之 人

久 保 田 儀 左 衛 門 儀 之 子 孫 之 祭 儀 也

也 祭 儀 之 上 之 祭 儀 也 祭 儀 之 上 之 祭 儀 也

也 祭 儀 之 上 之 祭 儀 也 祭 儀 之 上 之 祭 儀 也

也 祭 儀 之 上 之 祭 儀 也 祭 儀 之 上 之 祭 儀 也

也 祭 儀 之 上 之 祭 儀 也 祭 儀 之 上 之 祭 儀 也

也 祭 儀 之 上 之 祭 儀 也 祭 儀 之 上 之 祭 儀 也

